

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過しました。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第15回 父が語り継いだ胸に刻まれた日々

小出 慶子さん 昭和15年生まれ

昭和19年頃のことです。私は、母と4人のきょうだいとともに東京の目黒で暮らしていました。日を増すごとに空襲警報のサイレンが頻繁に鳴り響くようになり、配給でもらえる食糧は滞るようになりました。たとえ食べ物が入ったとしても、干した硬いトウモロコシやコーリャン(イネ科の穀物)といったものしかありませんでした。「このまま東京にいたら、降り注ぐ爆弾と飢えで死んでしまう」と考えた母は、疎開を決意し、私たちを連れて島根県の出雲へ向かいました。

父の戦場と生還

一方で、英語教師だった父は、日本が占領していた現在のシンガポールに陸軍の通訳として派遣されていました。父の任務は、敵兵に向けて英語で「降伏せよ!」などとラジオで呼び掛けたり、敵の戦意をそぐための宣伝ビラを英訳して飛行機でばらまいたりすることでした。

しかし、戦況が悪くなるにつれて、占領地から兵士が次々と引き揚げられていきました。父も帰国命令を受け、日本へ向かう戦艦に乗り込みましたが、その途中で敵の魚雷攻撃を受けました。兵士のほとんどが海に投げ出されたといわれています。多くの兵士が命を落とす中、泳ぎが得意だった父は、重油が漂う海を懸命に泳ぎ、飛び散った浮遊物にすがりつきながら生き残った数人と協力して、いかだを組みました。死体が無数に浮く中で、励まし合いながら一日中大



家族に囲まれる1歳の小出さん(右から2番目)

声で歌い続け、奇跡的に日本の輸送船が通りかかったことで、父は日本へ帰ってくることができました。

重油の中を長時間泳いだ影響で父は体が弱り、帰国後は広島県の陸軍病院で入院することとなりました。生死の境をさまよいながらも意識を取り戻すと、東京に残してきた家族の安否を心配し、あちこちに手紙を出して私たちを探してくれました。そして、私たちが出雲にいることを知った父は、歩くのもやっとの状態で私たちの元へ帰ってきました。痩せた体でつえを突き、白い着物に戦闘帽をかぶった傷病兵姿の父を見た時、私はその姿があまりにも変わり果てていて、父と思えず怖くて遠くから様子をうかがうだけでした。

父が帰ってきてからしばらくすると、広島に原子爆弾が投下されました。父がお世話になっていた陸軍病院も跡形もなく消えてしまったといえます。

終戦後、私たちは東京へ戻りました。父はしばらくして教師に復職しましたが、かつての教え子の多くが戦死したそうです。その事実深く胸を痛めた父は「彼らの無念の思いを語り継ぐために自分は生かされたのだ」と強く感じていたようです。

それ以来、機会を見つけては戦争の記憶を語り、「多くの人の死を無駄にしてはいけない。今の平和は戦争で悲惨な死を遂げた兵士や若者たち、そして大勢の尊い命の上にあるのだ」と、生涯をかけて訴え続けました。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和7年10月15日号 No.1541



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は10月3日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

昔読んだ本に書いてあった「秋の七草を愛でよう」。秋の七草とは、山上憶良が万葉集で詠んだ和歌に出てくるオミナエシ、ススキ、キキョウ、ナデシコ、フジバカマ、クズ、ハギのことで、8月下旬から11月ごろに咲く草花のことです。おかゆにして食べる春の七草に対し、秋の七草は鑑賞してその風情を楽しむのだそう。今年も暑い日が続き、なかなか秋の訪れを感じにくかったので、秋の七草を愛でに出かけてみようと思います。

リサイクル適性(㊞)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。